

# フランス語と日本語の時制・アスペクト機構

町田 健

MACHIDA Ken

## 0. 序論

本稿の目的は、事態の時間的特性を表示する言語的手段としての時制・アスペクト形態素の機能を一般的に定義し、系統的に異なり、時制・アスペクト体系も同一ではないフランス語と日本語について、それぞれの言語の文が表示する事態の時間的特性が決定される機構を明らかにすることである。自然言語の文が表示する事態の構造には普遍性があり、事態の時間的特性は、任意の事態がその構成要素として含むべき特性である。しかし、時間的特性を表示する言語的手段は、言語によって異なる。中国語やタイ語のように、そもそも時制・アスペクト形態素を使用しないか使用が義務的ではない言語もあれば、フランス語のように、時制表示の形態素はあっても、アスペクトを表示する特別の形態素を持たない言語もある。日本語や英語には、時制とアスペクトを表示する形態素がそれぞれ存在するが、時制・アスペクトの体系が異なるため、これらの体系を構成する要素としての形態素の機能は、両言語で等しくはない。かかる形態的相違にも関わらず、諸言語が表示する事態の時間的特性には高い類似性がある。言語が示すこのような現象を合理的に説明することは、言語研究が解決すべき重要な課題である。本稿は、異なる時制・アスペクト表示の手段をもつフランス語と日本語の時間的特性表示の過程を対照させることにより、当該特性を表示するために言語が用いる手段に関する一般性質を明らかにするための一助を提供することを目的とする。

## 1. 事態の時間的特性

文が表示するのは「事態」であるが、任意の事態は何らかの時間的区間（以下「時区間」と呼ぶ）において成立する。以下の諸例が示しているように、時区間は長さをもつ場合とそうでない場合がありうる。

- (1) 太郎は本を読んだ。（長さをもつ時区間）
- (2) 花子は駅に着いた。（長さをもたない時区間＝時点）
- (3) Jean a mangé des pommes.（長さをもつ時区間）
- (4) Marie partira à sept heures.（長さをもたない時区間）

事態が成立する時区間は、時間軸上に設定される基準時区間との関係によって決定される。ただし、時間軸上に絶対的な基準時区間は存在しえないから、通常は「現在」が基準として選択される。<sup>1)</sup> 現在は時点であるが、この時点を基準とし、これに先行する時区間が「過去」、後続する時区間が「未来」と定義される。事態の成立時区間を述語の形態変化または述語に付属する形態素によって表示

する言語形式が「時制（テンス）」である。

長さのある時区間において成立する事態には、通常は開始点と終結点があるが、提示されるのが事態の全体だとは限らない。以下の例を見ても分かるように、事態の全体が成立するものとして提示される場合と、事態の部分のみが成立するものとして提示される場合がある。

- (5) 太郎はそばを食べた。（事態の全体）
- (6) 花子はテレビを見ていた。（事態の部分）
- (7) Jean a construit une maison.（事態の全体）
- (8) Marie courait vite.（事態の部分）

事態の全体または部分が成立することを、述語の形態変化または述語に付属する形態素によって表示する言語形式を「アスペクト（相）」と呼ぶ。本稿では、アスペクト形式のうち、事態の全体を表示するものを「全体相」、事態の部分を表示するものを「部分相」と呼ぶことにする。事態の全体が成立したものと表示されている時、事態は成立時区間以外の時区間においては成立していない。一方で、事態の部分が成立したものとされている場合は、その成立時区間の前後の時区間においても事態が成立する。したがって、全体相の場合は、成立時区間が閉鎖されており、部分相では成立時区間が開放されていると見なすことができる。<sup>2)</sup>これより本稿では、アスペクト形態素が表示する時間的特性のことを「閉鎖性」と呼ぶことにする。

## 2. 時制・アスペクトを表示する形態素

### 2.1. 日本語の時制・アスペクト形態素

#### a. 時制

日本語の時制形態素は、{ru}と{ta}の2つであり、{ru}が「非過去」、{ta}が「過去」の時制形態素だとされる。ただし、次の例が示しているように、日本語の時制辞（時制を表示する形態素）が表示する時区間は、現在を基準時区間としているわけではない。

- (9) 太郎は花子が来ることを知った。
- (10) 花子は太郎がいる時に来た。

(9)の従属節「花子が来る」が表示する事態は、過去よりも後の時区間において成立するし、(10)の従属節「太 がいる」が表示する事態は、「花子が来た」という事態が成立する過去の時区間を包含する時区間において成立する。したがって、日本語の時制辞は、正確には{ru}が「基準時区間と同時またはこれより後」、{ta}が「基準時区間より前」を表示すると考えなければならない。時制辞の名称もこれに応じて「先行時区間辞」「後続時区間辞」のようにすべきだが、本論では、「過去」と「先行」、「後続」と「非過去」を同義として、従来通りの名称を使用する。

## b. アスペクト (閉鎖性)

日本語でアスペクトを表示する音形をもつ形態素としては、「見ている」「走っている」などの部分相を表示する動詞形に含まれる {i} であり、これが部分相のアスペクト形態素であると見なしてよい。一方、全体相を表示する動詞形は「見る」「走る」であるが、これらの動詞形は、語幹に非過去時制形態素 {ru} が直接後続しており、全体相を表示する特別の形態素はない。このことから、もし日本語において全体相に対応する形態素を設定するとすれば、部分相形態素と同様に語幹に継続するが、音形をもたない形態素 { $\emptyset$ } であるとしなければならない。

日本語の部分相形態素には、事態そのものの部分を表示する機能に加えて、以下の例が示すように、事態の終了後に、その結果として成立する事態の部分を表示する機能もある。

- (11) バスが停留所に止まっている。
- (12) カードの期限が切れている。

## 2.2. フランス語の時制・アスペクト形態素

フランス語の動詞は、屈折語的特徴を示すので、機能形態素を抽出することは難しい。時制とアスペクトに関しても、これらに個別に対応する特別の形態素は存在せず、動詞形全体で、成立時区間とアスペクトを表示する。フランス語の時制とアスペクトには、以下のような類別が認められる。

### a. 時制

現在 (C) を基準時区間とする時制：現在、複合過去、(単純過去) 半過去、未来  
過去 (A) を基準時区間とする時制：大過去、複複合過去、(前過去)、過去未来  
未来 (F) を基準時区間とする時制：前未来

### b. アスペクト (閉鎖性)

フランス語の伝統的な文法では、アスペクト的要素が記述されることはないが、時制を表示するとされる形式がアスペクトを同時に表示する。アスペクトといわゆる時制形式の対応関係は以下のようになる。

全体相：複合過去、(単純過去)、未来、大過去、前過去、前未来、過去未来

部分相：現在、半過去

事態 P を「動詞 (主語、目的語)」のような形で、事態の全体を [P] で、事態の部分を (P) で、[P] が現在において成立することを C[P] のように、事態 P の成立時区間と事態 Q の成立時区間の順序を P>Q (P が Q に後続)、P<Q (P が Q に先行)、P $\subset$ Q (P の成立時区間が Q の成立時区間に含まれる) のように表すとすると、以下の諸文に対応する事態の時間的特性は、文の下位に提示された式のようなになる。

- (13) Quand je suis arrivé à la gare, le train était déjà parti.

A{{arriver (je)} > [partir (le train)]}

(14) Marie lui a donné le pull qu'elle avait tricoté elle-même.

A{{donner(Marie, lui, le pull)} > [tricoter(Marie, le pull)]}

(15) Jean regarde la télé.

C{{regarder(Jean, la télé)}}

(16) Marie travaillait quand j'ai visité son bureau.

A{{travailler(Marie) ⊃ [visiter(je, le bureau de Marie)]}

### 3. 動作態

動詞形全体が表示する時間的特性の決定過程には、時制・アスペクト的特性だけでなく、動詞（語幹）がもつ時間的特性も関与する。動詞語幹そのものが事態の成立時区間を表示することはないから、動詞語幹に関して考慮すべきは、アスペクトと同様の、成立時区間とは無関係に表示される事態特性である。アスペクトが事態の全体または部分を表示するから、動詞語幹の時間的特性をこの性質に依拠して分類することが必要であるが、実際、動詞が表示する事態の全体と部分が等しいかという基準に従うことにより、適切な動詞分類を行うことができる。「均質性」と呼ぶことができるこの観点からの動詞分類を「動作態」と呼ぶが、動作態としては以下のものが設定される。

・完全均質動詞：成立時区間を構成する任意の時点において、事態の全体と部分が等しい。

ある（いる）、異なる、思う、見える、泳げる

être, avoir, éгалer, différer, penser, croire, ignorer, sembler, voir, entendre, ressembler

・部分均質動詞：成立時区間を構成する任意の時点において、事態の全体と部分は等しくない。しかし、一定以上の長さをもつ時区間をとれば、このような長さをもつ任意の時区間において、事態の全体と部分が等しい。

走る、飛ぶ、歌う、踊る、回る

courir, voler, chanter, danser, tourner

・非均質動詞：成立時区間を構成する任意の時点において、事態の全体と部分は等しくない。かつ、いかなる長さの時区間をとっても、この時区間における事態の部分と事態の全体は等しくない。

（家を）建てる、（本を）読む、（リンゴを）食べる、（絵を）描く

construire (une maison), lire (un livre), manger (une pomme), peindre (un tableau)

主張や命令などの発話行為を行う動詞は、文の発話に必ず一定の時間を必要とし、文の部分と全体は常に等しくないから、非均質動詞に属する。

言う、尋ねる、命令する、依頼する、忠告する、約束する

dire, demander, ordonner, requérir, conseiller, promettre

・脱均質動詞：長さのない時区間（時点）において事態の全体が成立し、本質的に事態の部分が存在

しない。

死ぬ、生まれる、見つける、見かける、取れる、釣れる

mourir, trouver, s'apercevoir, allumer, éteindre, tuer

・臨時的脱均質動詞：通常は部分均質または非均質動詞だが、事態の成立状況によっては、脱均質動詞と同様の時間的特性をもつ

倒れる、落ちる、変わる、さわる、打つ

tomber, changer, toucher, frapper, sonner

#### 4. 動作態と時制・アスペクト

動詞語幹に、日本語のように明示的であれ、フランス語のように非明示的であれ、時制・アスペクト形態素が付属する形式を「動詞群」と呼ぶことにしよう。動詞群が表示する事態の時間的特性は、動詞語幹が表示する均質性と時制・アスペクト形態素が表示する成立時区間および閉鎖性を合成することによって決定される。以下では、均質性と、成立時区間および閉鎖性の組み合わせがどのような時間的特性を表示するのかを、日本語とフランス語について記述する。

##### 4.1. 日本語

###### a. 非過去＋全体相

- ・完全均質動詞→現在または未来、全体または部分
  - (17) (今、明日) 太郎は家にいる。〈全体または部分〉
  - (18) 今山が見える。〈部分〉
  - (19) 窓を開ければ、山がよく見える。〈全体〉
- ・部分均質動詞→未来、全体
  - (20) 花子は歌う。
  - (21) 太郎は宴会で30分踊る。
- ・非均質動詞→未来、全体
  - (22) 花子は1週間で絵を描く。
- ・脱均質動詞→未来、全体
  - (23) 子供が明日生まれる。

ただし、主体を表示する名詞が無限個の実体を要素とする集合を表示する場合には、任意の時区間において成立する事態が表示される。

- (24) パンダは笹を食べる。
- (25) 人間は死ぬ。

#### b. 非過去＋部分相

- ・完全均質動詞→現在または未来、全体または部分
  - (26) 君の心には邪念が存在している。＜全体または部分＞
  - (27) フランスのフランス語とカナダのフランス語は異なっている。＜全体＞
  - (28) (明日は) 山が見えているはずだ。＜部分＞
- ・部分均質動詞→現在または未来、部分
  - (29) 太郎は走っている。
  - (30) この飛行機は1時間後には太平洋上を飛んでいる。
- ・非均質動詞→現在または未来、部分
  - (31) 花子は本を読んでいる。
  - (32) 将来太郎はトンネルを掘っているだろう。
- ・脱均質動詞→現在または未来、結果事態の部分
  - (33) 鳥が死んでいる。
  - (34) 明日にはもう荷物が届いている。

#### c. 過去＋全体相

- ・完全均質動詞→過去、全体または部分
  - (35) さっき庭にネコがいた。
  - (36) 昔はここから富士山が見えた。
- ・部分均質動詞→過去、全体
  - (37) 花子は一日中わんわん泣いた。
- ・非均質動詞→過去、全体
  - (38) 曾根は1分で大盛りラーメンを食べた。
- ・脱均質動詞→過去、全体
  - (39) 正午に列車が発車した。

#### d. 過去＋部分相

- ・完全均質動詞→過去、部分
  - (40) 太郎は故郷を思っていた。
  - (41) 花子は上手に泳げていた。
- ・部分均質動詞→過去、部分
  - (42) 太郎は15時間も眠っていた。
- ・非均質動詞→過去、部分
  - (43) 花子は最低4時間は壁を塗っていた。

- ・脱均質動詞→過去、結果事態の部分

(44) 魚が5匹釣れていた。

ただし、主体が多数または無限の実体である場合には、多数または無限個の事態群の部分を表示する。

(45) その町では赤ん坊が次々に生まれていた。

## 4.2. フランス語

### a. 現在 (現在、部分)

- ・完全均質動詞→現在、部分

(46) Jean est dans sa chambre.

(47) Marie ignore la vérité.

- ・部分均質動詞→現在、部分

(48) Jean travaille dans une banque (depuis deux ans).

- ・非均質動詞→現在、部分

(49) Marie écrit une lettre (depuis peu).

- ・脱均質動詞→未来、全体

(50) Je meurs!

ただし、主体が多数または無限個の実体の時には、任意の時区間において成立する事態群の部分を表示する。

(51) Les éléphants courent plus vite que les hommes.

### b. 複合過去 (過去、全体)

- ・完全均質動詞→過去、全体

(52) Jean a vu une belle fleur.

(53) L'année 2009 a été une année record dans la découverte de fausse monnaie

- ・部分均質動詞→過去、全体

(54) Marie a pleuré pendant une heure.

- ・非均質動詞→過去、全体

(55) Jean a écrit un mémoire en une semaine.

(56) Marie a fait des assiettes pendant deux heures.

(対象が不定複数の実体の時は、時区間の長さは不定である)

- ・脱均質動詞→過去、全体

(57) Jean s'est aperçu d'une fille.

### c. 未来 (未来、全体)

- ・完全均質動詞→未来、全体または部分

(58) Marie pensera à son fils. <全体>

(59) Il fera chaud quand il visitera la ville. <部分>

- ・部分均質動詞→未来、全体

(60) Jean mangera des gâteaux pendant une heure.

- ・非均質動詞→未来、全体

(61) Marie lira trois romans en un jour.

- ・脱均質動詞→未来、全体

(62) Jean rencontrera son copain à la gare.

#### d. 半過去 (過去、部分)

- ・完全均質動詞→過去、部分

(63) Marie semblait triste quand je l'ai vue l'autre jour.

- ・部分均質動詞→過去、部分

(64) Je suis entré dans la chambre de Jean. Il écoutait de la musique.

- ・非均質動詞→過去、部分

(65) Marie construisait une maison. Mais la construction ne s'est pas achevée.

- ・脱均質動詞→過去、事態群の部分

(66) Des gens mouraient à cause de la maladie épidémique.

(67) Michael Jackson: Paris trouvait que son père travaillait trop.

## 5. 説明のための枠組み

動動態 (均質性) と成立時区間、閉鎖性の合成によって事態の時間的特性が決定されることは、具体的事例を考察することで明らかになったが、次に問題となるのは、これら 3 個の要素がいかなる過程で合成されて、時間的特性が導出されるかということである。すべての事例を考察する余裕はないので、日本語とフランス語で 1 つずつ事例を選択して、時間的特性の合成過程の説明を試みることにする。<sup>3)</sup>説明を明示的にするために、若干の形式化を採用する。形式化に際して使用する記号は、すでに挙げたものもあるが、以下の通りである。

基準時区間 :  $R$ 、現在:  $r$  (時点)、時間的順序 :  $P < Q$ 、時間的包含関係 :  $P \subset Q$

事態の成立時区間 :  $t$ 、 $t$  において成立する事態  $P$  :  $P[t]$

$t$  を構成する時区間 :  $t_1, t_2, t_3, \dots, t_n$

$t$  を構成する時点 :  $d_1, d_2, d_3, \dots, d_n$

事態の全体 :  $|P|$ 、事態の部分 :  $p$  (時点)、 $|p|$  (長さのある時区間)、 $p, |p| \subset |P|$

事態の均質性を、以上の記号を用いて形式的に表示すると、次のようになる。



完全均質 Pc :  $\{p[d_1]=p[d_2]=p[d_3]=\dots=p[d_n]\} (d_i \in t)$

部分均質 Pp :  $\{p[d_1] \neq p[d_2] \neq p[d_3] \neq \dots \neq p[d_n]\} \wedge \{|p[t_1]=|p[t_2]=|p[t_3]=\dots=|p[t_n]\}$

非均質 Pu:  $\{p[d_1] \neq p[d_2] \neq p[d_3] \neq \dots \neq p[d_n]\} \wedge \{|p[t_1] \neq |p[t_2] \neq |p[t_3] \neq \dots \neq |p[t_n]\}$

脱均質 Pb:  $\{|P[d_i]\} (\wedge \neg \exists t (d_i \in t \wedge |P[t]))$

a. 日本語の非過去・全体相＋非均質事態：

先に挙げた文(22)「花子は1週間で絵を描く」の時制は「非過去」であるから、現在と未来のいずれかの時区間で事態成立を表示することが可能ではあるはずだが、現実には未来のみが表示される。この理由を説明してみよう。

非過去・全体相の形式的表示： $P=|P|[r \vee r < t]$

非均質事態の形式的表示：

$Pu: \{p[d_1] \neq p[d_2] \neq p[d_3] \neq \dots \neq p[d_n]\} \wedge \{|p[t_1] \neq |p[t_2] \neq |p[t_3] \neq \dots \neq |p[t_n]\}$

ここで、 $Pu=|Pu|[r]$ の時、 $Pu[r]=p[d_j]$ とする。

この時、非均質事態の定義より、 $p[d_j]$ 以外にこれと異なる任意の  $p[d_k] (1 \leq k \leq n, j \neq k)$  が存在する。

しかし、 $Pu=|Pu|[r]$ より、 $p[d_k] \neq Pu[r]$ なる  $p[d_k]$ は存在しえない。

ゆえに、 $|Pu|[r]$ は成立しない。

これは、非均質事態の全体が現在の時点で成立しえないことを意味している。したがって、非均質動詞は現在において成立する事態を表示できない。〔証明終わり〕

b. フランス語の過去・部分相＋部分均質事態：

先に挙げた例(65) "Je suis entré dans la chambre de Jean. Il écoutait de la musique." で、動詞 écouter は部分均質事態を表示し、動詞群 écoutait は半過去形である。最初の文は「私はジャンの部屋に入った」という事態だから、過去の「時点」において成立したものと見なされる。したがって2番目の文は、過去の時点において、事態の部分が成立したことを表示するはずである。この推論が正しいことを以下に証明する。

過去・部分相（半過去）の形式化： $P=p[t < r]$

部分均質事態 Pp の形式化： $\{p[d_1] \neq p[d_2] \neq p[d_3] \neq \dots \neq p[d_n]\} \wedge \{|p[t_1]=|p[t_2]=|p[t_3]=\dots=|p[t_n]\}$

ところで、 $|P|[t]$ かつ  $t < r, d_i, t_i \in t$ の時、 $p[d_i]$ または $|p[t_i]$ が成立する。

ゆえに、 $pp[t < r]$ は成立する。これは、部分均質事態の部分が、過去の時点において成立することを意味する。したがって、部分均質動詞の半過去形は、過去の時区間においてその部分が成立した事態を表示する。〔証明終わり〕

## 6. 結語

文が表示する事態の時間的特性を決定する重要な統語的要素は動詞群であり、動詞群は、動詞語幹と時制・アスペクト形態素によって構成される。動詞語幹が均質性、時制形態素が成立時区間、アスペクト形態素が閉鎖性に対応し、これらの特性が合成されることにより、事態の時間的特性が決定される。本稿では、この決定過程を、部分的ながらも、フランス語と日本語に関して明らかにし得た。ただし、事態を構成する要素としては、他に名詞が表示する事物や副詞が表示する事態の様態があり、今後はこれらの要素を組み入れた、時間的特性の全体的決定過程を明らかにしていくことが必要である。

### 注

- 1) 時間軸は無限の長さをもつ直線として表示することが可能であるが、すべての人間の使用に耐える基準時区間を設定する場合、「現在」の時点を選択する以外に適切な方法はない。「現在」は、通常「発話時点」として定義されているのだが、発話しなければ現在が認識できないわけではない。したがって「現在」の定義は困難なのだが、例えば、生存しているすべての人間が、事態の成立を直接的に認識することが可能な時点、のような定義が可能ではないかと考えている。
- 2) 事態の成立時区間について、全体相による成立時区間は、開始点と終結点という区間の両端が含まれているから「閉区間」であり、部分相による成立時区間は、区間の両端が含まれないから「開区間」である。
- 3) いくつかの例で付言しているように、動詞群以外の、特に主語や目的語の数的特性が事態の時間的特性に関与することは明らかである。したがって、文が表示する事態の時間的特性を総合的に説明するためには、名詞に対応する集合の特性を考慮する必要がある。

### 参考文献

- 岩本遠億（編著）. 2008. 『事象アスペクト論』 開拓社
- Guillaume, Gustave. 1929. Temps et verbe. Paris:Champion.
- Imbs, Paul. 1960. L'emploi des temps verbaux en français moderne. Paris:Klincksieck.
- Jones, Michael Allan. 1996. Foundations of French Syntax. Cambridge:Cambridge U.P.
- 金子亮. 1995. 『言語の時間表現』 ひつじ書房
- 金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」 『言語研究』 15 (金田一（編）1976 に再録：5-26).
- 金田一春彦（編）. 1976. 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 町田健. 1989. 『日本語の時制とアスペクト』 アルク
- 町田健. 2001. 「外国語との対照から時制をとらえる」 『言語』 30-13:18-25.
- Rohrer, Christian. ed. 1977. On the logical analysis of tense and aspect. Tübingen: TBL-Verlag. Narr.
- Vendler, Zeno. 1967. Linguistics in Philosophy. Ithaca, New York: Cornell University Press.